

研究分野のキーワード：文法研究、英文法、I 言語、無意識の知識、認知能力

研究紹介

例えば今、大学の講義棟にいるとします。その時、講義棟の天井や床が目に入ったとしても、そのことを(1)「講義棟が見える。」とは言いません。普通の場合、「講義棟が見える。」と言え、建物の外側にいて、その外側が見えているということです。しかし講義棟を見ることが講義棟の外側を見ることだからと言って、その外側だけが講義棟というわけではありません。例えば、(2)「太郎は講義棟の近くにいる。」と言え、太郎は講義棟の内側ではなく、外側にいることになります。もし外側、例えば外壁だけが講義棟の全てなら、その外壁の内側にいたとしても、(2)のように言えるはず。結局、私たちは講義棟をその外壁と、外壁によって囲まれている内側を含む全体として、理解していることになります。

しかし内側は外側と違い、具体的に理解されるものではなく、もっと抽象的に理解されます。例えば講義棟の内部を全面的にリフォームしたとしても、その中で講義が行われる等、一定の機能を保っていれば、依然として講義棟のままです。もし外壁はそのままで、内部がバーやダンスホールに改装されたなら、もはやそれを「講義棟」とは、少なくとも元と同じ意味では呼ばないでしょう。要するに、外側とは違って内側は、それが果たしている機能等の観点から抽象的に理解されるので、見るができないのです。冗談めかして(1)のように言うことはできるかもしれませんが、そうではなければ、「天井」や「床」など、具体物に言及するのが普通です。通常、建物の内側にいて(1)のように言われても、何のことを言っているのか、途方に暮れてしまいます。それは、外側と違って内側は、抽象的に理解するように、私たちの外界認識ができているからとしか、説明のしようがありません。

以上、私たちが教わったことはないけれども、指摘されればなるほどと気付くような言語事実の一つを、紹介しました。このような無意識の知識のことを、最近の用語で「I 言語」と言います。いわば頭の中に内在化された (internalized) 文法のことです。この I 言語の中身を明らかにしようとするのが、文法研究の目標です。簡単にいえば、ヒトが持っている、「教わったことがないのに、識っている知識」を、特に言語の場合について、明らかにしようとする分野です。人間が持って生まれた認知能力の一端を、言語を通して解明するという魅力的な分野に、英文法の勉強がつながっているということです。